

平成31年1月1日



亀井神道流 西日本吟詠会総本部 広報部
題字：波多江啓峰

吟友



初春の心字池 (撮影 花田宏陽)

新年祝詞



西日本吟詠会 最高顧問
太宰府天満宮 宮 司

西高辻 信良

新玉の年にあたり、皇室の
弥栄をご祈念申し上げるとも
に、会員各位におかれまし
ても、益々のご多幸とご健勝を
お祈り致します。

さて、我々日本人も他国同
様に伝統を重んじます。中
でも年中行事を行うことは、
なんらかの神様をお迎えする
意味もあり、大切な節目の日
でもあります。毎年正月に
は、その年の吉方である恵方
より訪れる年神様をお迎えし
ます。年神様は農耕をつかさ
どる神様である、御先祖様の
神霊であるなど諸説ありますが、
正月行事として神様を迎
え、お祀りし、一年間の家族の
健康と幸福を授けてくれる神
様として信仰されてまいりま
した。

玄関には年神様をお招き
する依代(よりしろ)ともいわ
れる門松や注連飾りもお飾

りします。注連飾りは、年神
様をお迎えするために飾りま
すが、こが清められた場であ
ることを示し、災いが入って
くることを防ぐといった意味も
あります。

また、若水という元日早朝
には水を汲み神様にお供えし
たり、その水で沸かしたお茶
を飲むなどする水がありま
す。新しい年を迎えて、水をこ
のようなかたちでいただくこ
とは、若水には人を若返らせ
たり邪気を祓う力があると
考えられてきたためです。

ほかにも一月七日には無病
息災を願ひ、七種の野菜や野
草を入れて作る七草粥もよく
知られており、すでに平安時
代には行われていたようです。
日本人は清浄であることを好
みますが、神様のように目に
見えないものを感じ、いつま
でも平安に暮らせるよう、この
ように口にするものまでも縁起
の良いものを選んできました。

伝統や地域毎の風習などの
継承が困難になっている現在、
新しい年の初めに、正月が清
浄を期して神様をお祀りする
重要な行事としても捉えられ
ていることを、今一度思い起こ
したいものです。

菅家の文華《和歌編》(上)



私たちが文神として崇敬してやまない菅原道真公は、日本の白楽天と称賛された優れた漢学者であり漢詩人でありました。その漢詩は自ら編まれた漢詩集「菅家文草」に四六八首と続編「菅家後草」に三八首それぞれ収められています。

又、和歌は、「菅家御詠集」と「菅家御集」及び太宰府で詠まれた「聖廟御詠」聖廟御集」に纏められています。



菅原道真公画像

ここでは、漢詩は次の機会に譲るとして、「百人一首」の年始めに相応しく道真公の和歌を繙いてみましょう。

太宰府天満宮から発行された

「菅家の文華」の中には、数多くの歌の中から二十一首の和歌が収められています。どれも道真公の有名な和歌として世に知られています。この他、数多くの秀歌を詠まれています。道真公が、漢詩人としてのみならず、優れた歌人として当時から高く評価されていたことが伺えます。

漢詩人としてのデビューは、十一歳の時、賦されたという「月夜梅花を見る」と言われていますが、和歌は何と五歳で庭前の梅を見て次の歌を詠まれています。



道真公、5歳にして、和歌を詠まれました。

「梅の花 紅の色にも 似たるかな
阿呼がほほにも つけたくぞある」

幼時から大宰府権帥として左遷され、配所に着かれるまでの間に詠まれた、歌で愛吟家が好んで朗詠する和歌をご紹介します。

寛平四年の秋、内裏で行われた歌会「后の宮の菊合わせ」では、和歌の浦近くの吹上浜を模した州浜に白菊を植える趣向が凝らされました。道真公は、それを花であろるか、それとも白波が寄せているのだろうか」と詠まれました。

「秋風の吹上^{ふきあ}に立^たてる 白菊^{しらぎく}は
花^{はな}かあらぬか 浪^{なみ}の寄^よするか」

又、昌泰元年、十一月、宇多上皇は物見遊山に随行され、大和にある道真公の山荘にお泊りになりました。百人一首にも選ばれている次の歌は、その途中で詠まれたと伝えられています。

「このたびは 幣^{ぬさ}もとりあえず 手向山^{たむけやま}
紅葉^{もみじ}の錦^{にしき} 神^{かみ}のまにまに」



宇多上皇に随行された道真公

「今度の旅は、お供の慌ただしさに、お供えの幣帛も準備できませんでした。この手向山の錦のように美しい紅葉を御意のままに帛帛としてお納め下さい。」と格調高く詠みあげられました。

又、その翌日には、吉野の宮瀧で、白い泡を立てて、たぎり落ちる飛泉を賞で、あたかも水引の白糸で織った布に例えて、次のように詠まれました。

「みずひきの 白糸^{しらいと}映^{うつ}えて 織^おるは たち^たち
旅^{たび}の衣^{ころも}に たち^たちや 重^{かさ}ねむ」

その数日後、菅家の故郷とも言うべき河内国土師の里にある菩提寺道明寺を通られ、次の和歌を詠まれました。

「紅に濡れつつ今日や句ふらむ
木の葉移りて落つる時雨に」

又、この歌と同じ頃の吉野山で
の歌として、

「ひぐらしの山路を暗み小夜更けて
木の末ごとに紅葉照らせる」

が、残されています。

次の二首は、詠まれた年と所は
不詳ですが、梅を愛され、誠の神
と称えられた道真公を彷彿とさ
せる歌をご紹介します。

「降る雪に色惑わせる 梅の花
鶯のみやわきてしのばむ」

「心だに誠の道に叶ひなば
祈らずとても神や守らむ」

昌泰二年二月十四日、道真公
は、右大臣に任ぜられました。三
度も辞退されましたが、受け入
れられませんでした。好事魔多
し、この頃、藤原一統の陰謀が進行
していました。

昌泰四年二月二十五日、運命の
日が訪れました。醍醐天皇の勅使

より大宰府権帥への左遷の宣旨
受けました。寝耳に水の道真公
は、宇多法皇にお縋りされようと
しましたが、叶いませんでした。

「流れゆく我は水屑となりはてぬ
君しがらみとなりてとどめよ」

と、その心境を歌に託されました。

昌泰四年二月一日、大宰府への
出発の日、宣風坊の庭前の梅は、
真つ盛りでした。道真公は、慈し
み愛された梅の花に向かい、別れ
の歌をお詠みになりました。

「東風吹かば匂い起こせよ 梅の花
主なしとて春なわすれそ」



「梅の花」に別れを告げられる菅公様

又、梅とともに愛でられていた
桜にも目を向けられ、「家より遠
き所にまかる時、前栽の桜の花に
結びつけ侍る」と題して、別れの歌
を詠まれたと伝えられています。

「桜花 主を忘れぬものならば
吹き来む風に言伝てはせよ」

道真公は、警護の武士にせきた
てられ、二人の幼いお子さんと従
者味酒安行らを伴い、お立ちにな
りました。次の歌は、宇多法皇に
奉った歌とも、奥方に贈られた歌
とも伝えられています。

「君が住む 宿の梢をゆくゆくも
隠るまではかへりみしばや」

菅家の菩提寺道明寺に立ち寄
り伯母覚寿尼と一晚語り明かさ
れましたが、翌朝警護の武士が、
故意に鶏を鳴かせ、出発の時を早
められたことを無常と思われ詠
まれたのが次の歌です。

「鳴けばこそ別れを急ぐ 鶏の音の
聞えぬ里の暁もがな」



道明寺での
伯母覚寿尼との別れ

筑紫への道中、道真公は、空の
星を見上げながら、道も宿もあ
るのに、未知の地、筑紫での生活を
思い量り、心落ち着かず、不安と
憂いを歌に詠まれました。

「天つ星道も宿りもありながら
空に浮きても思ほゆるかな」



苦難の末、博多の港に着かれた菅公。

無実の罪で濡れ衣を着せられ
た道真公は、長くて苦しい旅路の
末、失意のうちに配所の南館にお
着きになりました。(この項次号
に続く)

〈諫山岳陽識〉

謹んで新春のお慶びを申し上げます。

皆様お揃いで、清々しい新年をお迎えのことと拝察いたします。

平成の御代最後の年を迎えると同時に、若々しい息吹をも感じさせる新春となりそうです。新しい皇室の弥栄と日本の繁栄を心から祈念申し上げます。

新元号元年に当たる今秋、私達は節目の記念すべき創立90周年を迎えます。単なる通過点というだけでなく、次の100周年に向けてのスタートの年と位置付けたいと思っています。90年に相応しく、意義深く且つ思い出多き大会となるよう、皆で力を合わせて成功に導きたいものです。

私達は、5年前、会員数1000名で創立85周年を祝うことが出来ました。



少子高齢化の波は、例外なく

吟界にも押し寄せています。本会も少なからず影響を受けていることは否めません。

現在、「会員1000名で90周年を成功させよう!」を合言葉に、指導者、支部長、会員及び後援会員が心一つにして、会員増強活動を実施しています。皆様のご協力を伏してお願い申し上げます。

さて今年の干支は、「己亥」二つちのとい(きが)い)です。

その意味合いと運勢を繙いてみました。が、「つちのと」には、「完成した自己や成熟した組織へと変わる時期、つまり自己実現から社会への貢献に移る年に当たる」又、「亥」は、「個人は知識を増やし、

精神を育てる。組織は人材育成を固める」とあり、正に創立90周年を迎える本会のぴったりの年と言えましよう。

「亥」猪に因んだ四文字熟語の「猪突猛進」は必ずしも良い意味には使われていませんが、私達は、今年に限り脇目も振らず「猛進」しようではありませんか。

今年、60年に一度の「己亥の年」です。晩唐の詩人曹松作「己亥の歳」は、唐王朝の滅亡に繋がった反乱の最中に賦された反戦の詩であり、是非吟じて欲しいものです。

「沢国の江山 戦図に入る
生民 何の計あつてか
せいみん なん けい

樵蘇を楽しまん
きみ よ はな なか ほうこう
君に憑つて 話す莫れ 封侯の事
いっしょうこうな ばんこつ か
一将功成つて 万骨枯る」

昨秋、ある方から「おもしろ川柳」25首を頂いた。身に抓まされるものを5首選んでご紹介します。初笑いの種にお使い下さい。



「三時間待つて病名加齢です」
「少ないが満額払う散髪代」
「目には蚊を耳には蟬を飼っている」

「クラス会食後は薬の説明会」
「妖精と呼ばれた妻が妖怪に」

私も触発されて、駄作を一句。

「助手席の妻カーナビで道迷い」

最後に、皆様様の今年一年のご多幸、ご健勝並びに更なるご長寿を祈念申し上げ新年のご挨拶と致します。



新年祝辞

環境大臣・内閣府特命担当大臣
衆議院議員

原田 義昭



新年ご挨拶

西日本吟詠会後援会会長
(元RKB毎日放送代表取締役副社長)

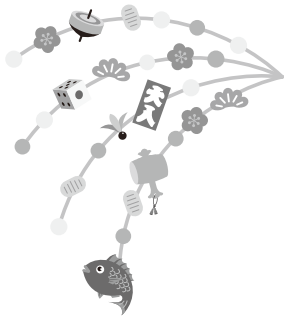
熊本 誠



新年明けまして、おめでとうございます。皆様お揃いで輝かしい新年を、お迎えのことと、心からお慶び申し上げます。平素より、会員及び後援会の皆様には格別のご支援を賜り、御礼を申し上げます。

さて、吟界におかれましては、諫山岳陽宗家会長をはじめ皆様方のためまいに精進の結果、詩吟が日本文化の一選を担うものとして、市民の間に広く浸透、普及してきたことは、大変喜ばしいことであります。また、本年十一月には創立九十周年をお祝いしての記念祝賀会も予定されており、日本文化へ深い造詣をお持ちの皆様、一人一人のご尽力の賜物と敬意を表す次第であります。

私儀ではありますが、この度、環境大臣・内閣府特命担当大臣を拝命致しました。これも偏に皆様のお支えの賜物と心から御礼を申し上げます。



新年おめでと〜ございます。西日本吟詠会会員の皆様におかれましては、お揃いで輝かしい新春をお迎えのことと、心からお慶び申し上げます。

今年の四月で平成の御代が終わり、五月一日から新しい元号がスタートします。貴会における平成時代の躍進ぶりは、目を瞠るものがありました。新しい年号に代わつても、その勢いを継続されますよう心から祈念しています。

今年の干支は「己亥」つちのとい「十二支は亥」猪です。この猪は有害鳥獣として嫌われている上、「猪突猛進」とか「猪武者」等あまり良いイメージの持ち主ではないのです。が、戦国時代の勇将・猛将と称えられた武将の中には、上杉謙信、井伊直政、黒田長政、福島正則、蒲生氏郷ら「猪武者」と呼ばれた名将も含まれています。

一軍の将が、率先して猛進しなければ部下は、戦わない

ものです。貴会も優秀な幹部・吟士が多数おられます。どうか、諫山宗家会長を先頭に一丸となつて猛進して下さい。

さて、貴会の会報「吟友」を毎号お届け頂いています。が、会員の皆様のご活躍とご隆盛振りが手に取るように目に浮かび、昨々が皆様にとり、充実した意義深い一年であったことを窺い知ることが出来ます。この秋には、創立九十周年記念吟詠剣詩舞大会並びに祝賀会を盛大に開催されるとお聞きしています。後援会と致しましても、物心ともに側面から応援したいと思っています。

最後になりましたが、記念大会を契機に、西日本吟詠会が名実共に西日本吟界ナンバーワンを目指して、更に二層の飛躍を遂げられることを、又、今年一年が、皆様にとりまして、健康で、明るく、実りある年でありますように、心から祈念申し上げ新年のご挨拶と致します。

「冬萌えに ありやなしやと 己問ふ」 まこと

吟声人語

平成の御世は今年春四月三十日で終わる。奇しくもこの「吟友」は、平成最後の発行が第七十号という節目の号を数えた。

第一号が昭和六十三年一月一日の発行であるから、ほぼ平成の三十年間に亘つての発行となつた。

▼第一号を繙いて見ると若々しく、凛々しい太宰府天満宮西高辻信良様のお顔写真と新年の祝辞を掲載させていただいて、懐かしさに加え、時の移り変わりに感慨深いものがある。

▼記事中には、物故となられた、故廣澤宗家、瀬川東行先生、横馬場翠邦先生らのお写真と含蓄のあるお言葉に触れることが出来る。

▼又、会員数が三三〇名に達したという記事も見え、三倍に増えた会員数と退会や死亡された先人、先哲のご苦勞に、改めて敬意と感謝の念を抱いている。

▼五月一日号は、新しい年号最初の吟友となる。新たな気持ちで挑戦したい。

〈岳〉

特別寄稿

吟詠の将来を考える

奎堂流正吟伝詩館 館長

藤本 奎月



漢詩を吟じる時は、その作者の人と為り、その場面、心情をしつかりくみ取って吟じる。それには、幾度も誦んじるぐらいよく読んで、頭の中に情景を広げ、その情景を声に出してどういう心で吟じるかということになろう、と云う事は観念的には理解していても、言葉と節のギャップ、というより「節ありき」で詩の意味は二の次という吟じ方を多く聞く。

例外はあるが七言の場合、二言二言三言という意味のつながりを持つし、五言の場合二言三言が一句を成すが、吟じる上でその三言の間に大きな揺りが入る場合が多い。

具体的に言えば、菅公の「九月十日」の起句、去年の今夜、清涼に待すの場合、清涼にで揺りを入れて、待すと主音に戻る。

清涼と待すは、にで繋いでいる二つの言葉とはいえず、続けて言わなければ意味を成さない。ところが清涼に、と揺りを入れて暫く引つ張る、或いは一休み

するぐらいの間を置いてやっと待すが来る。早に白帝城を發すの結句 萬重の山なども萬重の揺りをいれて主音に落ちて暫く引いて、山と来る、等と枚挙に暇ない。勿論大きく揺すれば呼吸が続かない。だからこそ隠し息盗み息もテクニクの二つとして練習するのである。

先日久しぶりにNHKの番組で詩吟を聴いた。まあこの番組ならばお手本になるものが聴けると思ったが驚いた。まず和歌であつたが見事な(皮肉である)アクセントを単語一つ一つに用い、美しき調であるはずが、ぎくしゃくとして、作者が聴いたらこんな詠じ方では無念に思うだろう、と感じた。日本語のアクセントはピッチアクセント(高さ)とは言え、この朗詠を聞いた時、このような極端な高低差では日常会話としてもとても成り立たない、と思ったほどのものであつた。

続いての漢詩の吟詠。案じた通り揺り終わつて一休み。そしてその揺りもその詩語に関わらず、喜びも悲しみも同じように華麗に回す。これが見本とされたら日本の吟詠はどうなるのか、と転た暗然たる思いである。「吟味」と云う言葉があるが、広辞苑にはその意味の二つに「詩歌を吟じその趣を味わうこと」とある。

趣を味わうにはその詩を深く理解せねばならぬ。帰する所は冒頭に述べたことに極まる。詩の意味が深く理解出来てい

ないから、節回しと美声で聞かせようとする。そう言えばひと頃アクセントアクセントと騒がれた時代があつた。詩情を深く理解して素直に吟ずればそう極端な間違つたアクセントにはならぬはず、と私は思う。

関東と関西と逆なアクセントの言葉もあるが吟詠としてそんなに可笑しい節にならないものだ。九州の人間は、中央に対してアクセントのコンプレックスが相当深いらしい。ある相当立派だと私が思つていた先生が、「若者が吟詠を余り好まないのはアクセントが正しくないから」と言われたのは吃驚した。又、今までの吟関係の書物に、アクセントの例を引くのに春簾雨窓に和すの冒頭「春は自ずから往来して」のところで、春をはる「る」の方を高くすれば、何かものを張ると間違えられるので注意とあつたには啞然とした。

例え春を春ときちんとしたアクセントで言つたとしても、この詩を知らない人には、春が自ずから往来するというのはどういう事か、そしてその続きも解釈してやらねば、到底アクセントを正しくすればすらすらと意味が理解出来る、というものでは「漢詩」はないのである。だから幾度も書くが詩を吟味せよ、である。美声が故に声に頼つて詩をないがしろにしてい

か。古今のごまんとある秀句を沢山読んで詩囊を膨らませてほしい。漢詩を作るのも勉強で

あるが、乏しいキャブラリーの中から、良いものは生まれ

ない。沢山読めば詩に対する想像力も着くし、詩語も自ずから増えてくる。

カラオケの教室でさえ、と言うとカラオケを蔑視しているとお叱りを受けそうだが、カラオケは歴とした日本語であるが、それでもカラオケ教室は、きちんと詩情を理解して感情をどう表現するかを勉強させる。

カラオケの方がいい勉強をしているのか。昔「私達は歌やだから、難しいことはわかりません」と言われた吟の大家が居られた。その時思つた、では何故、演歌などの日本の歌でなく漢詩を詠うのか、と。五十年もの昔のことであるが、今も同じことを思う。吟詠は詩心あつての上での節・声であると。付け加えると「吟詠コンクール」を否定するものではない。ただコンクールは吟詠の勉強のもう一本の道であらう。美声・優れた節回し、吟詠態度などで点数を付ける審査員に、詩の内容まで瞬間的に吟味するという事まで要求するのは無理である。しかし本来ならば、何首か規定して、どう詠うべきかを審査員自らが十分勉強した上での審査という事が望ましいと思う。

中国の文学である漢詩を日本の読み手に翻訳するのであるから、読み手に異同がある。過去に、それを誤読として減点したり、ひどいものになると明月の発音を

めいげつ、とせずめーげつと詠つたので五点減点という、何ともお粗末な審査員もいた。

生徒(セー・ト)丁寧(ティー・ネー)時計(トケイ)のようにエ列の次の拍にイが来た時、自然と引く音に変化する、とアクセント字典にあるようにめいげつは、めーげつと自然な発音になるのだ、ぐらいを知らず人を審査できるのか。教える立場、ましてや審査する立場に居る者はもっと勉強をしなければならぬだろう。もう一つ、吟詠の時間二分と云うのも「コンクール」上での時間の制約であるので吟詠は二分と云う制限は無い。手取り早く比べてみれば、川中島(通称)を二分かけて吟ずればとても戦にはならないし、道真公の謫居春雪を吟ずる時二分以内で詠うとすれば、如何に慌ただしい歎きになるか。是も又冒頭の話となる。

私はおよそ六十年、吟の道のみを深く深く掘り続けて他のことは何も知らない所謂「詩吟おたく」みたいなものだが、まだ未熟である。しかしもう加齢のため引退を決意した。こういうものは求めることに果てしが無い。

諫山(宗家)が「何でも言いたいことを書いて終わりにしたら如何か」と有難いお言葉を下さつた。ここで常々考えていたことを書かせて戴いた。こんなものを最後まで読んでくださった方は、よほど辛抱強いのか、探究心の深い方か、何れにしても感謝申し上げます。

ポリドール吟詠会 全国吟詠コンクール

松下瑛陽師範代が準優勝!! 入賞者も多数。

ポリドール吟詠会主催、第四十五回ポリドール全国吟詠コンクール決選大会が去る十一月四日(日)大阪・大東市立市民会館に於いて開催された。

後援は、ユニバーサルミュージック合同会社、太宰府天満宮、毎日新聞社等で同会館第一会場と第二会場に分けて実施された。

九州・山口からは本会も含め各部門に多数出場し、熱吟を披露した。

又、本会諫山宗家は、大会副会長として、第一会場審査委員長を務めた。

当日は、北海道を除く全国各地区本部の予選通過者が出場、レベルの高い吟詠を競った。

山口華雫大会委員長挨拶に続き、幼少年の部から、順次発表した。

各部門成績発表後、上位入賞者による決勝吟詠が行われた。



準優勝の後藤菜乃実さん

九州山口からは、和歌の部に本会松下瑛陽師範代と光洋吟詠会の井寺弘光さんが、又、青年の部に光洋吟詠会の古賀由美子さんが、又、壮年の部に井寺さんと佐賀豊明会の森 洋子さんが、それぞれ決勝戦に臨んだ。

その結果、和歌の部で松下師範代が準優勝、井寺さんが第四位に入賞した。

青年の部では、古賀さんが第三位に、又、壮年の部では、森さんが第三位、井寺さんが第九位に入賞した。

幼少年の部では、本会の後藤菜乃実さんが、見事準優勝を獲得した。



青木博笙副会長



講評中の小林会長

小林快川大会会長は、軽妙な中にも含蓄のある講評を行い、好評を博した。

総本部副会長で大会副委員長の青木博笙先生の閉会の辞で、盛会裡に無事大会を終了した。

- 当日の入賞者は次の通り
- ◆幼少年の部
 - ◎準優勝Ⅱ後藤菜乃実(岩戸佳陽会)
 - ◎第三位Ⅱ永江征人(唱陽会)
 - ◎優秀賞Ⅱ本山あい(太宰府星陽会)・船津慎之助(太宰府星陽会)・船津弥生(太宰府星陽会)・島原太宙(岩戸佳陽会)
 - ◆和歌・短歌の部
 - ◎準優勝Ⅱ松下瑛陽師範代
 - ◎入賞Ⅱ平山恵陽宗師範・



好成绩の幼少年達

喜びの言葉

師範代 松下 瑛陽

第45回ポリドール全国大会に出場し和歌の部で準優勝を頂きましたこと心より深く感謝御礼申し上げます。

これもひとえに諫山岳陽会長



準優勝の松下瑛陽師範代

先生をはじめ山下賢陽先生や諸先生方のおかげさまで。会場内では暖かく見守って下さり楽しい大会となりました。今年は風邪もひかず万全な体調で望めました。

いろんな大会に出るの幸。大好きな詩吟が出来ることの幸。今はひとつひとつ感謝の心でいっぱい。優秀吟士の勉強会の第一回目より参加させて頂き4年目を迎えています。第一回目の中頃、会長先生より前で発表する際は、これは常に大会なのだと思つて発表しなさいと注意され、それからは緊張感を持つて一吟一吟その言葉を念頭に置いて熱心にそして大切にに取り組むように心がけてきました。全国大会の決勝戦で途中マイクが下がり反省するばかりです。11月13日、山下先生の御前にも報告し、伴先生とお参りさせて頂き、奥様となごやかにお話をして帰りました。これからも亀井神道流西日本吟詠会の一員として融和協調、和の心とご縁を大切に努力精進させていただきます。ありがとうございました。

- ◆青年の部
- ◎入賞Ⅱ松下瑛陽師範代
- ◎優秀賞Ⅱ折居英月(北野真陽会)
- ◆壮年の部
- ◎入賞Ⅱ平山恵陽宗師範・橋口康陽師範・栖崎忠陽師範・前田学陽師範代
- ◎優秀賞Ⅱ加藤督陽師範・佐藤貴陽師範・八尋征陽師範代

謹んで新年のお慶びを
申し上げます

常任顧問・宗伝

鳥井 幸陽



皆様には輝かしい新年をお迎えのことと存じます。年号も新しくなり、わが西日本吟詠会も創立九十周年を迎え、今秋は懇親吟詠剣詩舞大会五十二回目になり、ますます友好団体の和が深まり大きく発展していくでしょう。

わが会としては、第一の目標、会員増強、吟詠力向上、団結力、思いやりの心等各自の自覚が必要となります。更に西日本一を目指すわが西日本吟詠会、たゆまぬ努力が肝心です。とわい、私、年を取りすぎました。でも西日本吟詠会に所属し吟を長く続けてきたお陰で、お腹から声を出す習慣が出来ていた事によつてこの命を頂いたようなもの、吟は止めることは出来ません。

多くの先生方に支えられ人様の手をとるようになった私、大会にも出場出来ませんが、毎日口にする吟、「私声が出る

間吟詠は続けます、声がつぶれない様に、守つて下さいね」と亡き夫に語りかけ夜は一日の報告、感謝の合掌と欠かせない日々です。

昨年は親子共病と闘い、勝ち抜きました。今年こそはと願いを込め東の空に向かって合掌、清々しい心で、おせちの席に着きます。又年齢を重ねました。九十才を越した三婆の一人です。

吟詠を楽しみ、わが会を誇りとしている三婆共々、宜しくお願い申し上げます。

南極の犬を吟じて

常任顧問・宗伝

鳥井 幸陽

昨年十月福岡市舞鶴公園に於いて各校区いこいの家で学ぶサークル活動の発表会があった、当仁校区のグループは、「南極の犬」を、和田先生を代表とした四名の先生と会員が吟じる事になり、ナレーショシヨンを入れ八分間の発表。

今より六十年前、昭和三十三年南極探険隊員は十五頭の犬を連れ、地球の最南端に向かった。南極では氷雪の中、そりを引き隊員と共に力を併せ大役を果たした犬！と語り出すと、ざわついていた会場

はシーンとなった。ナレーショシヨンは若い人に言つて欲しかったが、皆高齢者、仕方なく私が皆さんに向かって語りかけた。

一年間隊員と共に働き、大役を果たした犬達、二次隊員と交替する筈だったが、急激な天候悪化に危険を感じた隊員は総てを引き揚げる事となった、然しそりを引き大役を果たして呉れた、犬十五頭は鎖につながれ置き去りにせざるを得なかった。「ウオーウオー」と鳴き続ける声を聞きながら帰国した隊員、特に犬の世話をしていた隊員は胸が痛んだだろう。

一年後、再び南極昭和基地に向かうことになった隊員、その中に犬の世話をされた二隊員、せめて犬達を懇ろに甲うてやりたいと願ひ出て参加、プロペラの音を聞き一目散に走り来た二頭の犬、年長の犬から名を呼んだが何の反応もない、最後の二頭幼く飼育係の側で甘えていた、太郎と次郎、遅く生き残った犬「太郎か、次郎か」と名を呼ばれると喜びワンワンと鳴きながら飛びつき顔・首をなめまくった。隊員は涙を流しながら二頭の犬と雪の中を駆けまわった。

その状況は新聞に大きく報道された。記事を目にされた、松口月城先生は涙を流しながら、南極の犬」と題し詩を詠まれました。と語り続いて、吟を詠じたグループは、よく揃い多くの人に感動を与え、園長先生も素晴らしいかと、ご丁寧な挨拶を戴いた。私達の吟を聞かれたので、翌日の西日本新聞夕刊に南極の犬について、記事が掲載されました。その方はオーロラの観測を研究すると共に、犬の世話をする方だったのです。後に九大の名誉教授として長く貢献され、今もご健在です。舞鶴園でその事を知っていたらお話を伺いたかった、今思うと残念です。

十一月三日文化の日にも、当仁校区ふれあい文化祭で「南極の犬」を吟じた。

私は詩吟を学び、日本文化にふれ、豊かな知識を得て自分は何となく誇らしく感じた一日でした。

亀井神道流西日本吟詠会

ホームページで紹介

亀井神道流西日本吟詠会では、その名に恥じないホームページを公開しています。皆様のご意見に耳を傾けながら、更新して参ります。

ホームページアドレス
<http://kamei.dee.cc/>

行事予定表

- 1月5日(主) 新年会
- 1月14日(祝) 星陽会おさらい会
- 3月3日(日) 曲水の宴
- 3月10日(日) 県吟連春季大会
- 3月17日(日) 八葉会
- 3月17日(日) 毎日吟士権北九州
- 3月24日(日) 九吟連福岡予選
- 3月31日(日) 春季大会(第1部)
- 3月31日(日) 九吟連筑後予選
- 3月31日(日) 毎日吟士権北九州
- 4月7日(日) 筑吟連大会
- 4月14日(日) 奉賛会福岡大会
- 4月14日(日) 毎日吟士権福岡
- 4月21日(日) 毎日吟士権福岡
- 4月28日(日) 春季大会(第2部)
- 5月12日(日) 毎日吟士権本選
- 5月19日(日) 九吟連決選大会
- 6月2日(日) 和歌朗詠大会
- 6月9日(日) 鸞山流5周年大会
- 6月15日(主) 総会
- 6月16日(日) 天満宮杯福岡予選
- 7月7日(日) ポリドル予選
- 7月21日(日) 奉賛会山口大会
- 8月18日(日) 天満宮杯決選
- 9月29日(日) 太宰府市吟連大会
- 10月6日(日) 90周年記念大会
- 10月20日(日) 宰都館周年大会
- 10月27日(日) 県吟連大会
- 11月9日(主) 90周年祝賀会
- 11月23日(祝) 九吟連秋季大会
- 12月1日(日) 日総連九州大会

太宰府市吟詠剣詩舞連盟 第三十八回吟詠大会

太宰府市吟詠剣詩舞連盟
(会長 諫山岳陽宗家会長)
主催、吟詠剣詩舞大会は、去る
十月二十一日(日)に開催され
た。会場は太宰府館まほろば
ホールで盛大に楽しく盛り上
がった。

当連盟の名譽会長である井
上保廣様より祝辞を頂き、近
隣吟詠役員の諸先生方をお招
きしての大会になった。

諫山宗家会長の企画、構成
による「秋月の賦」が発表さ
れ、本会役員による、吟詠と市
吟連黒川邦勝副会長の社中、
秋山流喜衣会社中、大日本正
義流社中の皆さんによる詩舞
入りで構成され、見事な出来
映えであった。

その後の懇親会では、カラオ
ケ、踊り、全体踊りで盛り上
がり、来年の三十九回大会に向
かって頑張ろうとバンザイ三唱
で締めくくった。



式典で挨拶中の諫山会長



祝辞中の井上名誉会長

崇敬会だより

秘書部長代行

渡邊 鳳陽

去る十月二十三日(火)太宰
府天満宮崇敬会第五十回記
念奉幣大会が斎行された。

五十回という記念すべき節
目の大会で、厳肅な雰囲気
のもと、本殿で神事が執り行
われたが、崇敬会西日本吟詠
会支部の代表として諫山宗家
が、玉串拝礼に臨んだ。

神事終了後は、会場を余香
殿に移し、奉幣大祭並びに大
会が開催された。参加者全員
で敬神生活の綱領を声高らかに
唱和した後、西高辻信良宮
司が挨拶をされた。



西高辻宮司挨拶

今から五十年前、先代信貞
宮司が明治神宮の崇敬会を参
考に発足された経緯を詳しく
述べられた。その中で「日本人
の文化」「日本人の心」等、見え
ないものの大切さ、つまり絆や
思いやり、そして先祖と共に生
きる心の大切さを説かれ、天
神さまの真心を広めながら、
日本の伝統文化を次世代に伝
えて行きたいと力強く述べら
れた。

記念式典では、永年功労者
の表彰が行われ、宮司から立
石松翠吟道宰都館館長らに、
表彰状と記念品が贈られた。

恒例の講演会では、筑紫野
市出身の落語家、立川生志氏
の「笑いで元気に」と題してユ
ーモア溢れる軽妙な話題を語ら
れた。又、「お見立て」と題した
落語では、真打ちらしい話術で
満場の崇敬会会員の爆笑を
誘った。



熱演中の立川生志師匠

終了後は、本会から参加し
た四十四名をはじめ全員で直
会に臨み、五十回大会を祝い
大いに歓談して大会を終えま
した。

秋思祭に参加

副会長・秘書部長

諫山 星陽

去る十月十八日に太宰府
政庁跡で秋思祭が斎行され
た。旧暦九月十日に当たりま
す。今年は、天候に恵まれ澄
み切った空の下での秋思祭は
感慨深いものがありました。

宮司様の祝詞奏上に始ま
り、巫女さんによる悠久の舞
が厳肅に行われた。次に竹の
曲、筑紫箏曲の演奏、西日本
吟詠会の秋思の詩、吟道宰都



本会会員の献吟(秋思の詩)

館の今様入りの九月十日を
献吟した。最後に奉納者代表
が玉串奉奠を行った。それに
共なつて会員一同拝礼した。

宮司挨拶で春の曲水の宴は
「艶」『つや』で華やかな祭
りです。又、秋は「寂」で、静か
に天神様の苦しみや悲しみに
寄り添い御霊をお慰めする
祭りと申されました。

空には半月が輝き菅公も
同じ月を眺められたかと思
うと、胸が熱くなり家路に着
いた。

当日は寒い中、参加して頂
きありがとうございました。

福岡県吟詠舞連大会に出吟

福岡県吟詠舞連盟(西山啓峰理事長)主催、第三十八回福岡県吟詠剣舞大会が平成年号最後の三十年十月二十八日(日)福岡市西市民センターで開催された。

幼少年の部は、今夏の大雨、洪水等の影響により、授業振替の為、欠吟者が多かったのが少し残念でした。

本会からは、二宮一斗君、島原大宙君、後藤菜乃美さんがしっかりと披露し、盛大な拍手を受けた。出場者全員に理事長より図書券が進呈された。

本会今年の構成吟は、諫山宗家企画構成の「秋月の賦」を、大日本正義流政武館や喜衣流喜衣会及び邦勝会の華麗な剣詩舞と、本会の指導者、会員総勢一〇〇名による吟詠を披露、会場より盛大な拍手を受けた。会長吟詠では我々の諫山宗家会長、大会会長吟詠西山啓峰宗家らの心にしみる吟詠で、満場拍手の内幕を閉じた。



太宰府グループの大合吟「九月十五夜」 舞人は谷川光喜衣先生



構成吟「岡城址」舞人・宮崎義都先生



構成吟 橋本蓮さん剣舞



構成吟 男性指導者の地吟



岩戸グループの地吟 舞は高原清喜衣先生



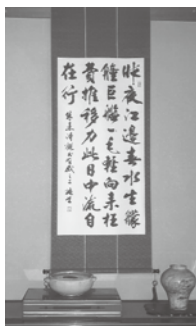
幼少年吟詠 島原大宙さん



構成吟ナレーター 中島光陽総師範

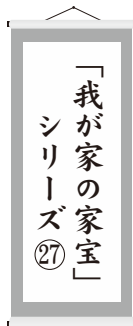


「月下の古城」舞人 澤野邦翠先生



三年前弟が趣味で集めていた物の中に、漢詩「書を観て感有り」朱熹作の掛け軸が、実家の床の間に掛けてありました。どうしても欲しくなり無理を云って頂いて来しました。今は形見になってしまいました。が、昨年宗家よりこの詩を指導して頂き、改めてこの吟の意味を知り指針として大事にしたいと思っています。

総師範 佐藤 貴陽



幼少年吟詠 二宮一斗さん

年男・年女

年男・年女を迎えて！
詩吟との
出逢いに感謝！

総師範 古賀 西陽
師範代 古賀 照陽

あけましておめでとうございませう。今年は6回目の年男を迎えます。妻の照陽は5回目の年女です。詩吟に出逢ったことが、私の人生を充実した実りある楽しいものにしていきます。初めて詩吟と出逢ったのはH5年10月に京都の「梅香流新道吟詠社」でした。そこで妻の照陽とも出逢いました。詩吟が取り持つ縁です。「亀井神道流西日本吟詠会」との出逢いは転勤で福岡に戻ってきた時でした。H7年6月にすぐに二人で入会しました。H18年3月に愛宕西陽会支部を開設し、H19年4月から愛宕公民館で詩吟教



お揃いで年男、年女の
古賀西陽総師範ご夫妻

室を始めました。以来、諫山宗家はじめ指導者の先生方、会員の皆さん達とのすばらしい出逢いや感動をもらっています。47年間のサラリーマン生活を卒業し、詩吟はライフワークとなっています。これからも詩吟に精進し、我が会の発展に微力を尽くしていきます。今年の90周年記念大会を成功させましょう！

大好きな吟に
出会えて



総師範
萩森 鶯陽

新しい年、明けておめでとうございませう。

宮崎鶯陽会も四月で十周年の節目を迎えます。私も一月生まれの六回目の年女です。西日本吟詠会は九十周年とお聞きしています。

御宗家始め諸先生方の御苦勞は並大抵ではなかったでしょう。本当に頭が下がります。始めて詩吟に出会えた時に、一ぺんに大好きになり、そして今があることに感謝

しています。最近思う事は全国大会に出場の皆様が、とても上手で勉強になります。日本の良き文化を未来に繋ぐ事だと思いで、手始めに幼い孫二人を入会させました。この子達が大人になる頃が楽しみです。又今の活動として、地域の文化祭にも出して、吟詠は小さな子供でも吟じられる事を見てもらっています。

二〇二〇年には、宮崎市で国民文化祭があり、県内の吟詠会の方々と出場の手筈となり、諸先生方のお力を是非お借りすると思ひます。宜しくお願い申し上げます。

吟と共に歩む

準師範



八尋 常陽

あけましておめでとうございませう。あつという間に六回目の年女となり、月日のたつ事の早さを実感しております。皆様今年もどうぞよろしくお願い致します。吟と出合つて二十数年、勉強す

ればするほど奥深く、なかなか難しいと思つていきます。これまで病氣もせずに元気に頑張つてくれた事感謝しています。亥の年教室の会員さんと共に無理せず楽しく仲間「一吟入魂」で精進していけたらと願っています。諫山宗家先生はじめ諸先生方、これからもご指導のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

猪突猛進で
頑張ります!!

太宰府星陽会

蒲池 香月

平成二十八年一月から、諫山星陽先生の御自宅にて詩吟、和歌を教わる為に主人とお伺ひして丸三年になります。お稽古の日はいつも笑いが絶えない明るい教室で先生方の熱心なご指導の下、楽しい仲間と共に頑張つて

います。習い始めの頃は詩を吟ずることと和歌を詠ずることはどういう事かも良く解らず、ただ大きな声を出すことと人の真似をしたりしていました。好きな詩例えば「舟中子規を聞く」や

「汪倫に贈る」等何回も練習しているうちにその風景や内容を想像しながら言葉一つ一つを大切に練習するようになりました。また声が細く蚊の鳴くような声だったり息が続かなかつたりで苦戦していましたが、詩吟や和歌を何度も何度も練習しているうち最近では少しずつ声も出て息も続くようになってきました。詩吟にしても和歌にしても奥が深くて一朝一夕にはいきません。毎日の地道な努力の積み重ねが大切だという事しかないうです。これからも少しずつではありますが、先生方から注意された事を直しながら努力を重ねて参りたいと存じますので、ご指導のほどよろしくお願い致します。





吟道証清めお祓い記念写真

後藤欄宜様より
吟道証を受け取る諫山宗家会長

去る九月八日(土)午前十一時から、太宰府天満宮本殿において、諫山宗家をはじめ幹部役員の方々が同席の上、本部師範代、皆伝、奥伝、中伝、初伝、幼少年の部の授伝対象者が参列し、吟道証の清めお祓いが厳かに執り行われた。

授伝部長

平山 恵陽

吟道証の清めお祓い

吟道証授伝者

◆幼少年の部

本山あい・二宮斗・島原大宙
石井アロエ・後藤菜乃実
齊藤華川・永江征人

◆初伝の部

夏梅千川・宗 國川・原 信川
樋口隆川・安武白川・江藤徹川
岡田洋川・石崎宝川・熊谷彬川
松原武川・大西寅川・大田富川
井上筑川・佐々木明川
伊藤佳川・福永鶴川

釈迦郡朝川・恵内慧川
中島泰川・小島節川・北原美川
八尋純川・榎本真川・平嶋美川
篠原正川・松尾千川・池田祐川
平山一川・山本喜久川
八尋信川・蔵田康川・平田優川
庄野京川・中野琵琶川・岩橋清川
今田瑞川

◆中伝の部

井上千月・船津蜷月・船越薫月
平嶋和月・蒲池香月・蒲池勝月
岡部博月・乾 栄月・宮野公月
今泉鶴月・後藤麗月・北川孝月
北川忠月・星野敏月・福山博月
牧野隆月・渡邊政月・吉鹿里月
藤田夏月・佐藤美月・河村光月
中野正月・岡部兼月・折居英月
小路糸月・糸永純月・池田莉月
池田華月

◆奥伝の部

◆皆伝の部

恵内隆峰・野田雅峰・土屋綾峰
梶原珠峰・郷原菊峰・古賀箔峰
大塚秀峰・後藤恭峰・柳 清峰
林谷典峰・高田成峰・柿木雄峰
橋本橋峰・迎 正峰・片山好峰
富田皓陽・古賀貞陽

◆本部師範代

昇格されました皆様おめでとうございます。

日総連 九州大会開催

日本吟詠総連盟(小林北鵬
総本部理事長)主催、九州地区
大会(西山啓峰大会会長)
が、昨年末の十二月二日(日)
福岡市博多区千代のガスホー
ルで開催された。

恒例の大会は、福岡と熊本
で交替で実施されるもので、今
回は福岡での開催となった。

大会には、九州各県から日
総連常任理事が参集、吟詠剣
詩舞を披露した。

本会からは、諫山宗家、野村
宗師、古澤副会長、安恒副理
事長が出吟堂々と吟詠を披露

した。
大会終了後は、九州地区役
員総会が行われ、活動報告、決
算報告、活動計画等が承認さ
れた。

総会のあと、会場を福岡
リーセントホテルに移し、懇親
会が催され、親睦と交流を深
め合った。
宴は、カラオケでのノド自慢
で大いに盛り上がった。



西山啓峰大会会長



浅山副理事長



式典風景



桃山玉雲先生



桃山流桃山玉聖先生

桃山流桃山玉舟先生
詩舞「さんざ時雨」

吟詠中の長谷川玉英先生

山田静燕広報部長の
祝辞

第48回九吟連 秋季親睦吟詠剣詩舞大会 盛大に開催!!

中島光陽総師範チームが

「三人の部」で見事優勝!!

「五人の部」でも準優勝。

九州吟剣詩舞道連盟(諫山岳陽理事長)主催第四十八回秋季吟詠剣詩舞大会が去る十一月二十三日(勤労感謝の日)太宰府市「プラム・カルコア太宰府」で開催された。

当日は、各本部所属の会員が多数出場して賑やかにそして、華やかに実施された。

まず、松口月城先生作詩の会詩を参加者全員で声高らかに合吟して幕を開けた。

恒例の合吟コンクールは三人の部三十六組、五人の部十二組が出吟して、日頃の練習の結果を発表した。

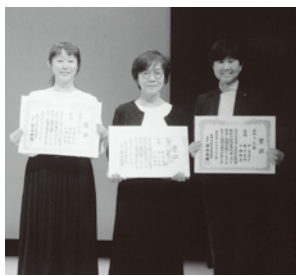
大会の華、構成吟は、今年も本会諫山宗家の企画構成による「西郷どん遺詠」が披露された。地吟は、歴代最優秀吟士で、素晴らしい吟声をバックに見事な剣詩舞が披露され、満場の観客を魅了した。



理事長挨拶の諫山宗家

会員吟詠では、各本部の地区理事と本部理事が独吟を披露、会員剣詩舞では、桃山流みやこ舞と秀月流季月会会員が華麗な舞を披露、盛大な拍手が贈られた。

式典では、今春就任した諫山岳陽新理事長が挨拶に立ち「今夏の大洪水で甚大な被害に会われた地域と皆様に心からお見舞いを申し上げますと共に一日も早い復旧復興を祈念します。



3人の部優勝の
中島総師範グループ



剣舞米加田由起衣先生



構成吟「瀉流」群舞中の桃山流みやこ舞社中



5人の部準優勝の岩戸扇陽会チーム



伊東山秀月先生の地吟「我が胸の」伴奏は原先生夫妻

又、松口月城先生をはじめ、九吟連の創立と運営に尽力された先人、先哲に対し、感謝申し上げます。二年後の第五十回大会に向けて大いに精進と研鑽に努めましょう。」と述べた。

表彰式では、各部門の入賞者に、諫山大会会長から賞状が手渡された。

大会終了後、会場を多目的ホールに移し、大会の目的の一つである親睦会を催した。飛び入りの歌あり、踊りありで、大いに歓談し楽しいひと時を過ごした。

尚、当日の合吟コンクールの成績は次の通り。

◆3人の部

◎優勝 中島光陽総師範

◎優 香月穂峰(吟友光陽会)・小路糸月(同)

◎第5位 八尋常陽準師範

◎大田心陽師範代・武内史陽師範代

◎第6位 大神靖陽師範代

◎中川万峰(太宰府君陽会)・森永祐山(同)

◎第7位 吉弘翔陽総師範

◎榑崎忠陽師範・森和峰(笙陽会)

◎第10位 山田啓陽総師範

◎池田慧陽師範代・松岡幸山(太宰府慧陽会)

◎第13位 梶原珠峰・岩戸扇陽会・林谷典峰(同)・野田美山(同)

◆5人の部

◎準優勝 立石琴陽師範・八尋征陽師範代・久我節峰(岩戸扇陽会)・柴田光月(同)・鬼塚鶴月(同)

◎第3位 船木燦陽師範

◎河原田和陽師範・吉弘響陽師範・佐藤貴陽師範

◎本田雅陽師範

◎第4位 近藤晴陽師範

◎田中丁陽師範・竹内恵峰(香椎晴陽会)・杉谷玲山(香椎鶴陽会)・安永奈山(同)

シリーズ④
新婚当時の思い出

副会長 宗伝 古澤 奏陽

昨年の秋、私米寿を迎え、家族や親せきにお祝いしていただき幸福な一日を過しました。思い起こせば昭和二十六年十一月、父の友人を仲人として結婚し、太宰府で六十七年がすぎ、まるで夢の様でございす。自宅での挙式で披露宴が二日間つづき、儀式で花嫁の「おのし出し」という作法があり連日緊張し、手のふるえを、今だに鮮明に覚えており忘れる事が出来ません。結婚当初の太宰府は田園が広がり淋しく、現在の太宰府天満宮の賑わいは想像出来ませんでした。



結婚式当日の御夫妻

嫁ぎ先は三代続いた飲料

水会社で、主人を中心に精一杯頑張りました。子宝にも恵まれ近所の方々と、良い出会いもあり感謝するばかりです。昭和五十年十月素晴らしい吟声の指導者にひかれ練習に通い始めたのが、「吟」との出会いです。吟歴四十四年となり健康で過ごすことが出来たのも「吟」のおかげと思っております。宗家諫山会長先生との出会いで又諸先生方からの愛に恵まれて今日があり、ただただ感謝するばかりです。

今年度、西日本吟詠会では九十周年を迎え、秋には記念大会が開催されます。私高齢の身ではありますが、精一杯頑張る覚悟でございす。西日本吟詠会の更なる発展を祈念致します。

新シリーズ②
支部長紹介

太宰府仁陽会

支部長 須崎 美峰



こんにちは、太宰府仁陽会の支部長を長年にわたりつとめさせていただいている、須崎美峰です。

太宰府仁陽会は、毎週火曜日プラム・カルコア視聴覚室で九時～十二時迄練習をしております。高木先生の魅力でしようか、生徒さんは男性が多い教室です。

先生は時に厳しく、親切・丁寧な指導、仁陽会の代表、藤龍峰さんの適格なアドバイス、一人ひとりが吟じられた後、合吟して終了。和気あいあいとした教室です。

長年にわたり仁陽会の代表として何かとお世話をしていただいた、藤龍峰さんに替わり、九月から会の代表を交代された、安東晴山さんの黙想のかけ声で、その日の練習の終わりです。これからもみんなで楽しく詩吟を続けていきます。

いと思います。

他に、鳥井幸陽常任顧問の実家「来光寺」で、少人数ですが月二回教室も開いています。

岩戸扇陽会

支部長 柴田 光月



二毎週水曜日教室PM一時
那珂川市中央公民館

毎週木曜日教室PM一時
恵子区公民館

毎週金曜日教室PM八時
後野区公民館

二練習方法

①黙想「腹式呼吸」

②母音「発声」練習

③課題吟詠集から

「吟詠・和歌の合吟」

④個人の希望吟・和歌

「コンクール出題」等

⑤最後に筑前今様合吟

小松先生の一声、二節、三音程の基本と母音等、熱心な御指導に感謝しております。教室は皆真剣に且つ和気藹々で一生懸命頑張っています。

三地域活動

①毎年十一月頃恵子区公民館文化祭「構成吟剣舞」

披露。

②同区敬老の日「吟・和歌」披露。

③毎年九月第二日曜日那珂川市吟剣舞連盟吟詠大会。(八つの流派との交流会。その後宴会)。今年

は創立25周年記念大会実施。

那珂川市文化協会の文化祭出場

④例年二月頃 諫山宗家御夫妻教室訪問

⑤年一回花見、カラオケ等 楽しんでおります。

四好きな言葉、座右の銘 「日々是好日」

♪あなた(西日本吟詠会、諫山御夫妻、小松先生、教室の皆様)に会えて本当に良かった。うれしくてうれしくて言葉にできない。この素晴らしい出会いにこの上ない喜びを感じています。これからはこの喜びを心情に吟詠の普及活動に努力、精進してまいりたいと思います。



会員訃報

藤澄陽先生逝去



故 藤 澄陽先生

藤先生を偲んで

三宅 昭陽

本会常任相談役で宗師範の藤 澄陽先生が、昨八月二十八日逝去された。享年九十三歳。

葬儀は、三十一日、総本部指導者や先生の門下生等が多数参列して、しめやかに執り行われた。

藤先生は、昭和五十二年四月入会以来、メキメキと上達され、翌年の初伝を皮切りに、順調に昇進され、昭和六十一年五月、師範代に昇格、指導者として岩戸澄陽会支部を開設、会員の育成指導に当たられた。

又、指導者の傍ら、本会の各部長職を歴任され、会の発展に大いに貢献された。

先生の本会での吟歴は、次の通り。

昭和六十二年六月 準師範
平成元年五月 師範
平成九年十月 総師範
平成十六年四月 宗師範

浄財御礼

故藤 澄陽先生の満中陰法要に当たりご遺族より過分なるご芳志を頂戴しました。謹んで厚く御礼申し上げます。

中島相談役死去



本会相談役 中島筵陽先生は、去る十一月二日死去された。葬儀は、十二月二日、西吟連、春日吟連関係者が参列して行われた。

当日は、元筵陽会員らが甲吟を献じ、別れを惜しんだ。法名 釈延徳享年九十三歳

中島先生は、昭和四十八年十月、当時の竹下支部に故山田溪陽先生らと入会。

昭和五十四年に筵陽会支部を開設し、指導を開始。

多くの会員を育成すると共に、春日市吟連二代目会長を勤められた。

中島先生の吟歴は次の通り。

昭和五十二年三月 奥伝
昭和五十二年四月 皆伝
昭和五十五年五月 準師範
昭和五十七年四月 師範
昭和六十三年五月 総師範
平成五年五月 宗師範
平成十七年五月 宗伝



特別寄稿 故久保園諒陽先生ご令室

久保園千枝子様よりの特別寄稿

平成二十三年十月十二日 他界された、本会名誉相談役宗師範故久保園諒陽先生のことを覚えておられる会員も数多いことと思います。

博学で教養が有り、温厚なお人柄で慕われていた先生です。その久保園先生のご令室には、吟友を毎号お届けして参りました。隅々まで目を通していただく読者のお二人ですが、この程お礼状と近況のご報告を頂戴いたしました。

千枝子様は、趣味の俳句と短歌を楽しみ乍ら余生を送られておられますが、昨秋、「アラレ娘」という雅号で所属されている「歌詠の会」で、指導の先生から、その出来映えを褒められたという秀句を頂戴しました。

ここに紹介いたします。

春うら 菊の花あり 宮の森
一打り 天鼓の音あり 秋の深
禅者の 石の縁 鮮やかに
紅きやうきを見守り

平成二十三年二月 久保園千枝子

特に一句目の「宮の森」は正しく太宰府天満宮境内の菊花展の菊の香りを愛でられた素晴らしい句です。

又、御令室千枝子様からは、福岡県内の紅葉の人氣ラッキンクのご紹介もあり、紅葉の季節には、是非とも訪れた各所を教えて頂きました。

- ◆第一位 雷山千如寺
- ◆第二位 太宰府光明寺
- ◆第三位 秋月城跡
- ◆第四位 太宰府 電門神社
- ◆第五位 呑山観音寺
- ◆第六位 英彦山神宮
- ◆第七位 城南區友泉亭
- ◆第八位 油山市民の森
- ◆第九位 舞鶴公園
- ◆第十位 楽水園

(博多区住吉神社北側)

さすがは、故久保園先生の御令室です。格調高い秀句に心が洗われる思いです。

現在、東区の介護付有料老人ホーム「ケアレジデンス青葉」で心豊かに過ごされています。故久保園先生もニコニコしながら、奥様を見守っておられることでしょう。

吟界訃報

工藤天水先生を偲ぶ会
桜楓流吟剣詩舞道会主催

故 工藤天水先生

平成三十年四月、急逝された、故工藤天水先生を追悼、追善する偲ぶ会が去る九月二十三日(秋分の日)、山口県宇部市文化会館に於いて開催された。

主催は、桜楓流吟剣詩舞道会(中尾桜楓会長)で、毎日新聞社、西日本地区吟詠詩舞連盟、山口県吟詠詩舞連盟等が後援した。

特に、今大会は、宇部市芸術祭活性化事業としての認定を受けたもので、宇部を中心に、山口県及び九州地区で活躍された故人の偲ぶ会に相応しい会場での開催となった。

大会には、御令室ミヨ子様をはじめご遺族の方々も参列され、改めて故人の人徳を偲び、その功績を称えた。

冒頭に、舞台の祭壇に飾られた遺影に対し、全員が黙祷して、安らかなご永眠を祈った。

地元山口県関係者の吟詠剣詩舞に続いて、追悼式典が行われた。

式典では、西日本地区吟詠剣詩舞連盟会長太田虹松先生作詩による「嗚呼工藤天水先生」を参加者全員で合吟し、遺徳を偲んだ。

中尾大会会長挨拶に引続き、太田西吟連会長、諫山岳陽本会宗家、毎日新聞城井課長が、工藤先生との思い出や功績を披露した。

最後に、ご遺族を代表してご長男が謝辞を述べられた。

来賓吟詠剣詩舞のあと、会場を国際ホテルに移した直会では、故人が好きだったカラオケ等で大いに盛り上がった。工藤先生の大好きだった「和気藹々」の通りの素晴らしい「偲ぶ会」でした。

諫山宗家が献吟した「追悼の詩」は次の通り。

吟友を弔う

うちつけに聞くぞ悲しき 君なしと
言うはまことか 夢かあらぬか
ありし日の 君が御姿 今やなし

涙に綴る 哀悼の詩

人生の 帰する処 九泉の 天
彷彿たる 温容 眼前に 浮かぶ
曾て聴く 吟声 猶耳に 有り
訃音の 暗雨 涙 未だ 乾かず



謝辞を述べる中尾桜楓大会会長

新シリーズ 「漢詩と諺」

No.2

歲月は人を待たず

若い方とはともかく、時の流れの早さを痛感されている人が多いのではないのでしょうか。

この諺は、皆様ご存知の通り、吟界では、五言絶句「勸学」の結句として紹介され、コンクール課題として採用されています。

しかし、この詩は、今から、六〇〇年以上前、中国南北朝時代の文学者で詩人の陶淵明の長詩の一節であることは、知られていないようです。

陶淵明は「雑詩」と題する十二行からなる長詩を十二首賦していますが、これは、その第一首の後半四行部分です。

雑詩(その二)

人生 根帯無し
飄として 陌上の塵の如し
分散して 風を遂うて転ず
此れ已に 常の身に非ず
地に落ちて 兄弟と為る
何ぞ必ずしも 骨肉の
親のみならん

十二行を通して吟じてみると、陶淵明が言わんとしたことが、良く理解出来るのではないのでしょうか。
「歲月は人を待たず」という諺がひとり歩きしている感があります。が、貴重な時間を大切に余生を楽しみたいものです。

歡を得ては 当に楽しみを
作すべし 斗酒 比隣を聚む
盛年 重ねて来らず
一日 再び晨なり難し
時に及んで 当に勉勵すべし
歲月は 人を待たず

「勸学」と言えば、いかにも勉学のみ推奨しているように思えますが、全体を読むと、「人生は、短くはかないものです、嬉しい時は友人、知人を集めて、大いに楽しもうではないか。」と、学問のみならず、人生を楽しむことに勉め、励みなさいと言っています。

那珂川吟連25周年 祝賀大会を盛大に開催!!

那珂川町吟剣詩舞道連盟
(松本緑扇会長)主催、創立二十五周年記念吟剣詩舞大会が、去る九月九日(日)那珂川町中央公民館に於いて開催された。

平成三十年十月二日、念願の市制移行直前での大会で、来賓の武末茂喜那珂川町長をはじめ、後援先の山口志郎那珂川町文化協会会長等が臨席して盛大に開催された。大会は、小松扇陽吟連副会長の開会のことを皮切りに、先ず、松口月城先生作の「那珂川町吟会詩」が合吟された。

幼少年及び所属会員による合吟が披露されたあと、記念式典が取り行われた。

式典では、来賓の武末町長等が、祝辞を述べた。

特に、十月一日より念願の市への昇格に伴い、益々の発展と文化芸術の薫り高いまちづくりへの期待が表明され、意義ある節目の大会に相応しい式典となった。



記念式典風景(祝辞中の諫山宗家)

本会の諫山宗家も吟界を代表して、祝辞を述べた。『自然に恵まれた環境に加え松口月城先生縁りの土地で吟詠剣詩舞を学ぶ皆さんは大変幸せで羨ましく思います。』と祝意を述べた。



松本緑扇先生の大会会長挨拶



河津館長の剣舞

大会会長として挨拶に立った松本緑扇会長は「松口先生や、先代松本緑扇先生の熱心な支援と尽力のお陰で連盟が設立され、本日節目の大会を迎えることが出来、幾多の先人先輩に感謝を申し上げます。晴れの市吟連と名前が変わりますが、今後共、努力精進します。」と決意を述べられた。



高原先生吟詠歌謡「祝宴」



黒川邦勝先生の祝舞「高砂」

来賓吟詠剣詩舞では、近隣の吟詠連盟会長等による吟剣詩が披露され、大会に華を添えた。

場所を「味のながわ」に移した祝賀会では、前町吟連会長渡邊昇陽先生の乾杯の音頭で開宴、歌有り、踊り有りの賑やかな宴会が繰り広げられた。

本会の岩戸グループ会員も町吟連事務局長を努める後藤佳陽先生をはじめ、多数参加し、運営の中心をして活動し、大会を成功に導いた。

さて旧年の九月九日に、那珂川町吟剣詩舞道連盟創立二十五周年記念大会を、開催致しましたところ、ご来賓の皆様には公私ともにお忙しい中、ご臨席賜りましたこと心より御礼申し上げます。

御礼

理事長 渡邊 昇陽

愛宕校区文化祭に
参加して

総師範 古賀 西陽



愛宕文化祭に出場した西陽会の皆さん

西郷南洲を偲んで

笙陽会 野村 正山



文化祭で合吟 笙陽会の皆さん

寿楽園文化祭参加

師範代 森田 弘陽

有住公民館文化祭サークル発表会に参加し、大河ドラマで人気の「西郷どん」をイメージして、西郷さんの代表作和歌三首と詩吟「偶感」と「絶筆詞」、又福岡市出身の平野国臣作「我が胸の」を合吟しました。会場の多くの聴衆の方が、熱心に耳を傾けていただき中には一緒に口ずさんでいらっしゃる人の姿を見て、会場の皆様と文化祭を通じて楽しく共有出来た良い一日でした。

去る十月十九日(二十日)にわたり福岡市立老人福祉センター寿楽園に於いて演芸等含め盛大に開催されました。金山詩吟教室が、十九日に出吟する事を知り入江頌陽・柴田勘陽両先生と協力して参加しました。その為、吟詠する、漢詩、和歌、筑前今様の内容を教えて頂き、詩吟が如何に健康増進等に繋がるかという事を会場の皆様に朗詠を通して伝えたいとの主旨に賛同し参加する事としました。当日は、天候が不順でしたが、来場者が多く、司会の方より提出された参加コメント文を紹介して頂く中で、末文に記載された言葉に「一度、教室にお立ち寄りしませんか、お待ちしております、大歓迎です」と、読み上げて頂いた事は、会員募集の一助として皆様に受け止めて頂いた事と思います。出吟者九名は、朗々と吟詠し終わった直後、会場の皆様から大喝采を頂いた事に感慨無量でした。

八重亀区敬老会で
詩吟を披露!!

総師範 加藤 督陽



参加者による合吟発表風景

去る九月十五日、金島小学校児童保育所の子供達二十名が八重亀敬老会で祝吟として「富士山」を披露いたしました。夏休みの短い期間ですが今年で三年目となり、だんだん詩吟にも慣れてすばらしい吟をするようになりました。口を大きく開けてお腹から声を出すこと、教室では色々なグループに分けて合吟したり、独吟させたり礼節や態度等々折にふれて教えています。

会場ではお孫さんや、近所の顔みしりの子供達に目を細め大変喜んでいただきました。

会員投稿

太宰府仁陽会 太田 恭川

・夕度急ぐ厨の寒さかな

・はしゃぐ子も静まりて聞く

除夜の鐘

太宰府仁陽会 古賀 詩川

・太閤の 野望の城趾 枯芒

・熱燗の 温くなりたる

愚痴ばなし



祝吟を披露する保育所の子供たち

本部師範代となつて

柴田 勘陽

四月に任ぜられ、寿楽園教室で教えることになりました。六月より本部研修で鍛えられています。私は貧農家の大家族で育ちました。苦学して高校・大学を卒業し、仕事に就きました。父は私が十歳の時に他界しました。母の苦勞は筆舌に尽くし難いです。その母は唯一の趣味が詩吟でした。兄姉やもちろん私の祝儀の時、そして甥や姪達の祝儀の時はいつも祝吟をしてくれました。また祖母や父、先立つた私の兄や姉の葬儀の際にも弔吟をしていました。その母も九十一歳で他界しました。

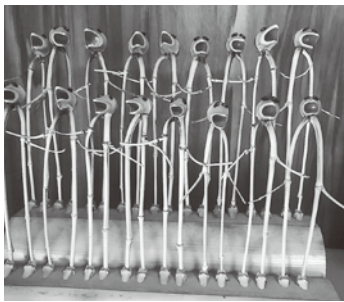
と思いましたが……？
習い始めの頃は、なかなか音程がつかめなかったり、ブレスの方法が分からず、こりやだめかな！と挫折しそうになったのですが、先輩の武田御夫妻の励ましやコンダクターを手に入れた事でやっと立ち直れました。特別研修とくに本部研修で宗家会長の直伝を受けて、自分の疑問点が一つずつ溶けていくように感じています。戸川先生が研修内容をよく伝達されていたなとしみじみ感じています。私も生徒さんへは研修を生かし、できるだけ分かり易い指導を心掛けたいと思います。吟号の勘陽は父の名から取りました。もともとずっと早く力をつけて、上がり症を克服しながら、大会等独吟の時に、天国の母へ届くような心を込めて吟詠できるようにしたいです。今カラオケが一番のストレス解消です。詩吟がストレス解消(生き甲斐)になる目を目指して、漢詩や和歌の歴史や書の研究と併用しながら、諸先輩の吟をお手本にし、又宗家会長の直伝を血肉にしなから、感性を磨いて参りたい誓いを新たにしています。

趣味の竹細工

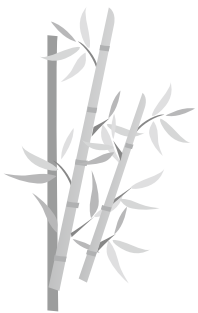
吟友光陽会 片山 好峰



永年の趣味で作った竹細工ですが、吟詠を題にして面白いものが出来上がりましたので、詩吟を愛する皆様に御覧戴ければと思い投稿致しました。



作品名「合吟」



特別寄稿

筑前流吟舞道筑聖会

菊池美代子(聖穂)

平成歳旦

天長 温厚 民の親しむ所
淑麗の皇妃 至意淳なり
雅楽瓊音 酬唱楽しみ
九重の城闕 慶雲新たなり

(詩意)

天皇陛下は何時も民と同じ目線で、穏やかに優しい眼差しで親しくお話を下さっています。また、おつれあいであらせらる皇后さまも情に厚く何事にも行き届いたお心で、民と接して下さっています。新年をお迎えなされた天皇ご一家、また皇族の御一家には美しい音色の雅楽、詩歌を作つて、お互いやり取りして楽しんでおられることでしょう。皇居の辺りには、新年をお祝いする如くめでたい雲がたなびいています。

崇敬会会員を募集しています 貴方も会員になりませんか？

私達は、太宰府天満宮崇敬会に入会、西日本吟詠会支部会員として、年1回の清掃奉仕活動のほか、天満宮様主催の旅行会や、崇敬会奉幣大祭に参加させて頂いています。

特に、大祭での講演会は、毎回著名な講師による素晴らしいお話を聞くことが出来、大好評です。又、会員には為になる会報や有難いお札等も配布されます。正会員と家族会員があります。

入会ご希望の方は、秘書部まで、お申し込み下さい。

- (語意)
- 天長―天皇階下
 - 温厚―おだやかで情が厚い
 - 淑麗―つれあい
 - 皇妃―皇后様のこと
 - 至意淳―情に厚く行き届いた心
 - 雅楽―正しい格調の音楽
 - 瓊音―澄んだ調子の高い音響
 - 酬唱楽―詩歌を作つて互いにやりとりして、楽しむ
 - 九重城闕―皇居のこと
 - 慶雲―めでたい雲、良い事のある前兆の雲

第50回 秋季懇親吟詠剣詩舞大会

第五十回秋季大会が、十月七日(日)プラム・カルコアの大ホールに於いて開催された。

前日の台風接近で心配されたが、当日は秋季大会を祝うかの如くに快晴となった。

本年も会員の合吟は年毎にレベルが高まり、日頃の熱心な練習の程がうかがわれた。

中でも「四海波民謡入り」の合吟は思わず拍手をしてみよう熱演であった。

構成吟は、今年のNHK大河ドラマの主人公である西郷隆盛に因み、「西郷どん遺詠」を剣詩舞の皆さんと共に維新の時代にもどったかのような一幕であった。



式典風景(中央は、挨拶中の諫山宗家)

式典では来賓の井上保廣様より我が会の文化活動に期待しておられる事等のご祝辞を頂いた。



井上後援会副会長

尚、今大会では、今年九十九才の宮澤宗伝の力強い吟に会場より拍手が沸いた。

プログラム最後の宗家会長の独吟は、新体詩「帰省」と云うかつてない吟に観客の耳に強い刺激を与えられた。

続いて先日太宰府天満宮で清めお祓いをして頂いた吟道証が会長より手渡された。

皆伝・本部師範代を授与された方々には、色々なコンクールで受賞された方もいて頼もしくさらなる活躍を期待したいものである。

大会終了後の直会はよく飲み、よく食べ、参加者全員がすっかりくつろいだ様子で盛会のうちに終わった。

合吟コンクールも併催

岩戸扇陽会が優勝・準優勝・第三位を独占

当日実施された合吟コンクールには、二十九組の参加者で熱吟を競い表した。

成績は次の通り。

◆優勝Ⅱ岩戸扇陽会

野田清山・榊次史月・井上咲川

◆準優勝Ⅱ岩戸扇陽会

林谷典山・梶原珠山・野田美月

◆第三位Ⅱ岩戸扇陽会

久我節峰・鬼塚鶴月・柴田光月

◆第四位Ⅱ笙陽会

野村正山・桃島由希・高瀬潤子

◆第五位Ⅱ吟友光陽会

福地浩山・野田洋月・小路糸川

◆第六位Ⅱ太宰府星陽会

萱嶋桃月・蒲池香川・山崎晴川

◆第七位Ⅱ香椎晴陽会

平田直峰・竹内恵峰・中垣千佐子

◆第八位Ⅱ笙陽会

前田輝峰・鳥飼公山・岡部兼川

◆入賞

○太宰府君陽会

中川万峰・森永祐山・後藤麗川

○太宰府啓陽会

筒井勲山・新開政月・今村利明

○香椎晴陽会

菅野藤月・福山博川・牧野隆川

○太宰府星陽会

萱嶋功月・蒲池勝川・宗 國弘

○太宰府奏陽会

住田博川・安部宮川・富永延代

○岩戸扇陽会

田中瑞月・藤波純川・長野芳子

○太宰府啓陽会

片山里月・吉岡美川・小野律川

今回も後援会の剣詩舞の先生方に友情出演していただき大会に華を添えて頂いた。

秋季大会に感銘

太宰府啓陽会 井上 寧

心配された台風二十五号の影響も無く、秋晴れに恵まれ、第五十回大会に初めて参加させて頂きました。

私達太宰府啓陽会会員は地域のコミュニティに集合し、揃って大会会場へ向きました。

私は、皆様方の服装をはじめ華やかな中にも整然とした雰囲気緊張しました。

幼少年の皆さんの子供らしい伸び伸びとした吟詠や琴、尺八伴奏に乗った素晴らしい吟詠、更には、構成吟の華麗な剣詩舞の見事さに感銘を受けました。

私は入会間もない会員ですが、山田啓陽先生の親切丁寧な指導のもと、何とか吟詠を続けて行こうと考えています。

当日は、あつと言う間に過ぎ去りましたが、会場の余韻を残し乍ら、帰路につきました。

大会の運営に携われた先生方に心から感謝と御礼を述べたいと筆を取りました。どうも有難うございました。



吟界朗報

韓国・百済文化祭に、
基鶯流吟詠会が参加交流!!

吟詠剣詩舞を披露

基鶯流吟詠会(坂口鶯壽会長)は、九月十四日から十八日までの五日間、韓国「第六十四回百済文化祭」に招待され参加した。



基鶯流吟詠会は、白村江の戦いの後に日本防衛の為に築かれた朝鮮式山城「基肄城」が基山町にある縁で文化祭の推進委員会から招かれた。

日本刀を使った剣舞や扇子を使って舞う詩舞は、大好評で、観客から大きな拍手を贈られた。



団長の坂口鶯壽会長より文化交流会について報告していただきます。

百済文化祭は、日本と関係が深かった、古代百済の都があつた公州市と扶余で毎年開催される歴史的な再創造祭で、昨秋の九月十四日から二十二日まで実施された。国家予算も計上され韓国三大文化大祭の一つに数えられています。

開会式は、百済と日本が力を合わせて戦った「白村江の戦い」の古戦場「白馬江」の雄大な河川敷に三万人を超える観客が入場する中で開催されました。

今年で六十四周年を迎えたこの文化祭は、ユネスコ世界遺産でもある、百済歴史遺跡地区を基盤に、百済の子孫たちと観光客が共に力を合わせ、世界的な歴史文化祭を行つていきます。

今回は、私達を含め三十数ヶ国から参加、各会場でそれぞれ素晴らしいパフォーマンスを披露しました。

私達と中国代表「成都楽団」の二チームが、百数十組の参加団体の代表として四時間にも及ぶ開会式セレモニートップを飾りました。

私達は「基山伝統公演団」として紹介され、各国の駐在大使とその家族の列席の目の前で、剣詩舞、吟詠歌謡を披露、大変な称賛をいただきました。

開会中、百済文化祭推進委員会本部を表敬訪問し、委員長室に於いてチョン委員長と総合プロデューサーのソウ氏と会談し、その後会食に招待され、楽しく有意義なひと時を過ごしました。

開会中は三国の公演を行い、日本の伝統文化を各国の人々に紹介するという貴重な体験を通して、お互いに交流を深めることが出来ました。

六市文化団体発表会

第22回福岡IIブロック
芸術の祭典に参加

第26回ふくおか県民文化祭二〇一八参加、第22回福岡IIブロック「芸術の祭典」が「飛梅にかたり継ぐふるさと絵巻」と題して去る十月二十一日(日)プラム・カルコア太宰府大ホールで盛大に開催された。

この祭典は、太宰府市・大野城市・春日市・那珂川市・筑紫野市・糸島市の六市が加盟する文化団体が毎年担当して実施するもので今回は、二十二回目の大会が太宰府市で開催された。

特に今回は、那珂川町が市に昇格しての祭典として大いに盛り上がりを見せた。

開会式典では、福岡IIブロック協議会会長で政武館館長の河津義政先生が、主催者として挨拶された。

祭典の最後を飾るフィナーレでは、本会会員と香陽流香陽吟詠会が所属する太宰府市吟詠剣詩舞連盟会員による大合吟が披露された。

本会太宰府地区女性指導者による「謫居の春雪」と香

陽流香蘭会吉塚香蘭先生と江頭香龍先生の連吟「東風吹かば」は大好評で、満場の観衆から盛大な拍手が送られた。

又、文芸美術展会場では本会平山恵陽先生や吉村梨州先生の漢詩や書画が展示され、芸術の祭典に相応しい催事に多くの見学見物者が訪れ芸術の秋を堪能した。



道真公絶筆「謫居の春雪」合吟の
西日本吟詠会員



「東風吹かば」朗詠の
香蘭吟詠会会員

会員 平山宗師範が 朗報 最優秀賞を受賞!!

全国漢詩大会

平成三十年十一月十一日
(日)新潟県三条市「諸橋轍次記念館」に於いて「第十回諸橋轍次博士記念漢詩大会」が開催された。

この大会は、「大漢和辞典」や「広漢和辞典」の編者で漢字研究者、諸橋轍次博士の功績を称えて毎年開催されているもので、今回で第十回目の節目の大会を迎えた、漢詩界で最も権威のあるものです。

国内はもとより、中国、韓国、香港、台湾の漢詩人にも認知されている大会で過去には、亀谷翠風先生の優秀賞をはじめ、斎藤南岳先生の八木ヶ賞、村上英洲先生の入賞等、福岡在住の漢詩作家が多数受賞した大会です。

このような錚々たる漢詩人を輩出する福岡詩壇の中で、見事に、日本一とも言うべき、最優秀賞及び諸橋轍次賞を本会平山恵陽宗師範が受賞したことは、大変な快挙であり、本会にとつても名誉なことです。

諸橋轍次博士記念漢詩大会



最優秀賞を手に。
平山恵陽宗師範



亀谷翠風先生(左から2番目)

諸橋博士縁りの新潟で行われた表彰式に師とも仰ぐ亀谷翠鶯福岡漢詩連盟事務局長と共に、表彰式に臨んだ平山宗師範は、「夢のような気持ちで、未だ信じられませんが、これからは、賞に恥じないように精進します。」と喜びを語りました。

入賞作の詩文と喜びの言葉は次の通りです。

「初夏屋久島に遊ぶ」

鬱蒼たる 深淵 蘇溪延ぶ
太古の 風は香りて 歩は仙の若し
行く行く 愷しむ 猿聲 鳴鹿の影
帰程 覚えず タ陽の前

喜びの言葉

宗師範 平山 恵陽

「日中平和友好条約締結四十周年記念」「第十回諸橋轍次博士記念漢詩大会」で、思いもかけず、最優秀賞を頂戴し、驚くと共に、その賞の重みに只々恐縮しています。十月の末、一通の封書を開いた時は、我が目を疑い、何かの間違ひではないかと思いました。

大会当日の諸橋博士生誕地下田郷は、紅葉も鮮やかな秋晴れの天候に恵まれました。

表彰式では、夢のようなひと時が、あつと言う間に経過しました。その後、「曲水の宴」に招かれ、錚々たる先生方に混じって、短冊に筆を運び、流れ来る赤い盃をいただきました。



中国蘭亭より寄贈の石庭での「曲水の宴」風景

太宰府天満宮の曲水の宴で、朗詠者として参宴したことはありますが、詠み人としては、初めての経験で緊張で筆を持つ手も読み上げる声も震えました。

この受賞の陰には、平素何かと指導いただいている亀谷翠風先生をはじめ、本会出版部長として、テキスト編成の際、色々とアドバイスを賜った諫山岳陽宗家会長に心から厚く御礼申し上げます。

尚、授賞式終了後、良寛が庵を結んだ、国上山の国上寺「五合庵」の前で、良寛作七言絶句「半夜」を吟じました。

表彰式、曲水の宴と併せて生涯忘れられない素晴らしい思い出となる一日でした。

会員募集活動実施中!

西日本吟詠会では、全会員を挙げて新会員募集活動に取り組んでいます。皆様の周りには、生き甲斐や癒やしを求め、新しい趣味や出合いを求めている方が、多数おられます。

まずは声を掛けて下さい。そして、教室の見学や大会見学に誘って下さい。「一見は百聞に如かず。」募集活動には、勧誘リーフレット・会報「吟友」・テキストを無料配布して、「吟詠がいかにか解り易く趣味として最適か」を説いて下さい。

組織強化部

ようこそ 西日本吟詠会へ

- 太宰府奏陽会 〓 畑山日出子
- 太宰府啓陽会 〓 井上 寧
- 貞陽会 〓 再入会 〓 古賀 貞陽
- 鎌田 里見
- 太宰府星陽会 〓 土井ますみ
- 吉川 幸栄
- 西公園紫陽会 〓 古賀 明美
- 筑紫野宏陽会 〓 古川 勝代
- 和田キヌエ・兼清 愛子
- 河野 勝代・貞島トミエ
- 皓 陽 会 〓 梅津 敬子
- 唱 陽 会 〓 糸永 孝也
- 笙 陽 会 〓 原田 正子
- 岩戸凜陽会 〓 島崎佐登美
- 吟友光陽会 〓 今里 力



副賞の琵琶・カップと賞状

このコンクールは、琵琶界で最も権威のある大会で優勝の高木さんには、文部科学大臣賞やNHK会長賞等素晴らしい副賞を受賞した。



高木青鳳さん

去る九月開催された、第十五回琵琶楽コンクール大会で、本会岩戸扇陽会所属の高木青鳳さんが、見事第一位(優勝)を獲得した。

会員朗報 高木青鳳さん日本一に 琵琶楽全国コンクールで!!

高木さんは、筑前琵琶保存会のメンバーとして、地元福岡のみならず、全国を舞台に活動中で、今後益々の活躍と更なる飛躍が期待されています。

特に今秋の創立九十周年記念大会では「菅原道真公」(仮題)と題し、筑前琵琶の特別演奏をお願いしています。現在、作詞・作曲が順調に進んでいる由、今から演奏が待たれます。

高木青鳳さんの喜びの言葉は、次の通りです。

「この度、九月九日に東京茅場町・東京証券会館ホールで開催された、『第五十五回琵琶楽コンクール』において第一位に入賞致しました。

併せて、文部科学大臣賞・NHK会長賞・日本琵琶楽協会会長賞・辻靖剛賞・鶴田錦史賞・石田琵琶店賞を同時受賞しました。

日頃より応援・激励してくださる皆様あつての結果と心から深く感謝申し上げます。

このコンクールは、琵琶の演奏家で組織している『日本琵琶楽協会』が、年一回開催するもので、筑前琵琶・薩摩琵琶・錦琵琶など様々な琵琶の奏者が参加しています。

予選は、テープ審査、前年度秀位以上の入賞者は予選を免除され、毎年二十五名が本選に出場します。

第一位から第三位の他、秀位数名が選ばれます。

私は昨年に引き続きの参加で、昨年は秀位入賞でした。

自分は古典曲が疎かである基礎が固まっていけないという危惧があり、その克服策の一つがコンクール挑戦でしたが、まさか二回目で第一位に選んでいただけると、本当に驚倒の一言です。

今後は、更に精進を重ねて琵琶道の深奥を極めて参りたいと思います。

又、小松扇陽先生から指導頂いている吟道にも習熟に努めると共に、琵琶の中にも漢詩や和歌、今様等を取り込んだ新作ものの作詞にも力を注ぎたいと考えています。

秋の九十周年記念大会で特別演奏の機会を頂戴できることに、感謝しています。

第32回

県吟連 ゴルフコンペ

藤浪さんが準優勝!!

福岡県吟詠剣詩舞連盟ゴルフ同好会第32回ゴルフコンペが、去る十二月二十七日(火)二丈カントリークラブで開催された。

当日は、絶好のゴルフ日和で、熱戦が展開されたが岩戸昇陽会の藤浪重憲さんが、準優勝を獲得した。



県吟連ゴルフコンペ参加記念写真



私の秘伝料理 シリーズ⑬

リンゴの甘露

師範 橋口 康陽

◎作り方

リンゴの古くなった物を皮をむき8つ位に切り、塩水につけ水けを取り、りんご2個に対して200gの砂糖で弱火で柔らかくなる迄煮ます。最後に酢を少し入れる。又、卵の白味をあわ立て、冷やしたリンゴにかけると、少しシャレたおやつになります。



吟界朗報

宮崎水銘先生
山口県文化功労賞を受賞

宮崎水銘先生

平成三十年十一月二十六日、山口県庁において、山口県文化功労賞の授賞式が行われた。

ポリドール吟詠会や日本吟道奉賛会、更に西日本地区吟詠剣舞連盟の活動を通じて、本会会員とも馴染みの深い吟道水銘流会長、宮崎水銘先生が、音楽部門で見事、文化功労賞を受賞された。

当日は、山口県村岡副知事から、授賞者一人ひとりに賞状が手渡された。



この文化功労賞は、山口県で、文化に関する創作や地域の文化団体の活動を通じて、文化の振興に顕著な功績があった個人や団体を対象として毎年表彰されるものです。

吟界では、初めての受賞で、正に快挙とも言うべき功労賞受賞です。

宮崎水銘先生は、現在も毎日吟士権の審査員をはじめ、ポリドール吟詠会九州山口本部常任顧問のほか、九州山口地区各連盟の要職を歴任されています。

宮崎先生は、受賞の喜びを次の様に語られています。「これからも、詩吟を通して世の中を平和で住み易い処にする為に、各吟詠団体の先頭に立ち、この素晴らしい吟道精神を

地元山口から日本中に広める為、微力を尽くして参ります。」

先生の吟歴は次の通り。

- ◆住吉神社吟詠会会長
- ◆吟道水銘流吟詠会会長
- ◆下関吟道連盟理事長
- ◆毎日吟士権大会審査委員
- ◆日本吟道奉賛会・西吟連・山口県連役員を歴任。



受賞記念写真

ニコニコBOX
浄財ありがとうございました

鳥井 幸陽 山田 啓陽
野村 聡陽 中島 光陽
渡邊 昇陽 橋口 康陽
諫山 星陽 榑崎 忠陽
松嶋 蓮陽 前田 学陽
久保山 孝陽 花田 宏陽
平山 恵陽 松田 瑛陽
大田 君陽 大田 心陽

テキスト・CD完成

私達が今年一年使用する来年度大会用課題吟テキストとCDが完成しました。

今回も吟士諫山宗家、伴奏伊地知彰山、合屋小代子両先生でCDジャケットには熊本城天守閣等を使用し華やかに仕上がりました。



小松 扇陽 八尋 征陽
後藤 佳陽 熊谷 美陽
近藤 晴陽 船木 涼陽
渡邊 鳳陽 西浦 桜隆
船木 燦陽 (桜香吟詠会副会長)
肥塚 景陽 光武 松寿
斉藤 汪陽 森 和峰
河原田 和陽 久我 節峰
吉弘 翔陽 松岡 幸峰
石村 笙陽 香月 穂峰
吉弘 響陽 木山 純山
野村 真陽 柴田 光月
佐藤 貴陽 鬼塚 鶴月
本田 雅陽 小路 糸月
立石 琴陽 西光寺 光月
古賀 富陽 折井 英川
荻原 唱陽 中内 鶴川
池田 慧陽 (順不同・敬称略)

編集後記

新年明けましておめでとうございます。昨年の日本は地震や自然災害が各地で起こり大変な年でしたが、今年は平穏な年になりました。

今年は西日本吟詠会創立九十周年になります。皆さんと共に大会が成功します様に頑張りましょう。

●広報部員の顔ぶれ

広報部長 …… 吉弘 響陽
部長代行 …… 佐藤 貴陽
部員 …… 立石 琴陽
…… 花田 宏陽
…… 山口 皇陽

発行者 亀井神道流西日本吟詠会事務局 那珂川市道善三六 渡邊昇陽方

印刷所 大成印刷株式会社

（お詫びと訂正）

「吟友」九月号6頁・7頁の「秋月の賦」詩文中、左記の通り、誤りがありましたので訂正してお詫びします。

「運営」 ↓ 「軍営」
「三五の月」 ↓ 「三五の夜」
「不落の名」 ↓ 「不落の城」

